

SSKA 東腎協

89年10月25日

No. 79

東京都腎臓病患者連絡協議会（東腎協）
事務局・〒161 東京都 [REDACTED]
郵便振替口座 [REDACTED]
電話・ [REDACTED]

昭和四十一年八月七日第三種郵便物認可
一九八九年十月十二日発行
毎月六回一の日の日発行



え・大森 輝秋

●おもな記事●

- 青年婦人部発足に当って…………… 3
- 石川勇吉さん さようなら…………… 4
- 患者会活動の調査結果…………… 7
- たえこのひとりごと<27>…………… 8
- 会員さん訪問<35>柴田千恵子さん……………10
- 腎臓病と全腎協（第4回）……………12
- ブロック交流会見聞記……………20
- 趣味のグループ紹介 1 食べ歩き……………21

つい最近、私の病院で患者会の役員をしている親しい友達がなくなった。彼は私よりも年下で透析を始めて約十五年近くになり、透析の記録をのばす良いライバルと思っていたので、私自身ずいぶんがつくりし気落ちした。彼と一緒に透析の記録を延ばし元気でいる事が、また私自身の生きがいの一つになると思っていたからだ。

彼と同じく透析患者の多くが良いリズムが一度崩れると、急に悪くなりあつと言う間に亡くなり、ほんとに私達は死と背中併せに生きていく感じがする。私の回りには透析していても、非常に元気な人が多いが、慣れた透析でも一歩間違えば、また慣れているからなおさら早めに適切な処置をしなれば、透析のリズムが崩れ、悪い方向に向かう。一步悪い方向に向かうと、その速度は普通の人にとって早く、また体が弱っているだけ加速度がつく。早めに気が付き真剣に取り組み、良いリズムに戻す努力はしたい。この努力も透析患者には、生きがいの一つかも知れない。また良いリズムで透析をしているときは、あまり物事を深く考えないほうが良い。何と言っ

リレー・エッセイ

21世紀に向かって

常任幹事 東野 榮夫



ても明るく楽しく生きるのが、透析の長生きの秘訣と思っている。命は親からもらった大切なものである。元気で何も心配なく生活している人も多いが、今日の世の中では交通事故などで明日の命は分からない。せつかくこの世に生き生活をしているのだから、生きがいをもつても持ち、生きていく命は大切にしたい。一年前、セスナ機が墜落して、幼い子供の命が二人も一瞬にして失われた悲しい事件があったが、この記事を読んだとき目頭が熱くなり、人の命など何と分からないものだと思っただ。たぶん子供達は生きていれば、これから将来有望で世の中の面白いこと、楽しいこと、また悲しいことも沢山経験出来、生きがいも沢山もてたかも知れない。また結婚して子供を育てる楽しみ、苦勞、親孝行のまねなど一通り出来たかも知れない。何と言っても口惜しいのは、新時代、二十一世紀で十二分に活躍出来たのに残念でならない。

世の中には色々な病気と闘い、明日は分からないという人が一杯いるが、みんなそれなりに努力して精一杯生きている。私も腎臓が

悪く十三年も前から人工腎臓による透析をうけ恩恵を受けているが、昔は透析しても二、三年の命が、その間の医学の目覚ましい進歩のお陰で、今日まで生きています。今では少し摂生して療養すれば、透析で二十年以上は生きられる時代だが、私は少なくともあと十年は生きたい。私には妹が二人いてそれぞれ子供達がいるが、近くにいるせいか一番小さい姪が一番かわいい。かわいい姪が幼稚園、小学校、そして中学校に進むとき、その成長して行く過程と一緒に見守りたいからだ。姪が中学校に進学し気が付いたとき、私は透析して二十年以上生きて来たのだと、姪に感謝したい。私の大事な生きがいの一つにちがいない。欲を言えば二十年ほどおまけして、長生きさせてもらえれば二十一世紀になり、新時代を拝めるのだが。二十一世紀になれば、今では考えもつかない新治療方法が考え出されるかもしれない。いや、考えだされるに違いない。それまで新治療方法を私なりにあれこれ考えながら、頑張つて透析をしながら、生きがいを持ち明るく生きて行きた

青年・婦人部発足に当って

青年婦人部準備委員長 金子 智

東腎協は、今年で結成十七年目を迎えました。結成当時は、人工腎臓の不足・多額の医療費自己負担など大変厳しい状況の中におかれました。

今日、私達腎臓病患者は、長年の患者運動の結果、福祉制度、透析技術の向上により長期透析が可能になり、医療費の自己負担も軽減され、当時から見ると大変恵まれた状況の中で、透析を受けることができるようになりました。

しかし、そのことよって、また新たな問題が出てくるようになります。透析患者の高齢化による、入院施設・病院・介護の問題、長期透析による合併症、患者運動への無関心化・役員不足などさまざまな問題が出てくるようになります。

東腎協では、腎疾患対策推進委員会、会員拡大・交流委員会、教宣委員会、編集委員会の四つの専門委員会を作り、これらの問題を検討・対応してきました。しかし、

若い人や女性の患者会活動の無関心化、役員不足、就職や結婚の問題などについて検討する委員会がなく、専門の委員を作ってほしいという声が多く、今年の第十七回総会で、青年婦人部委員会(仮称)

の発足に向けて準備するという事になりました。現在青年婦人部準備委員会を作り、平成二年一月の発足に向けて準備を進めています。

しかし、活動の方向など、具体的なことについては、また手探り状態、今後各県の青年部や婦人部の活動などを参考に、活動の方向を決めていきたいと思っております。

つきましては、各病院腎友会や個人会員の若い人や、女性の方ができるだけ多く参加していただきみんなで力を合せて活動していきたいと思えます。また年配の方には、いままでの経験などをお聞かせいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

関東ブロックが

青年交流会

常任幹事 本間 正良

関東ブロック第三回青年交流会が、九月九、十日の両日にかけて栃木県日光の湯本温泉「奥日光高原ホテル」にて栃木県腎協ならびに同青年部担当で開催されました。関東ブロック各県から青年男女を中心にして三十五人の会員が参加し、東腎協からも男子三人、女子二人の計五人が参加しました。九日午後三時現地集合で集まった参



高原で語らいながらの昼食

加者は、三時三十分から六時までテーマ別の会議に入りました。就職・職業・生活・収入・結婚・男女の問題・会活動などいろいろな問題について活発な話し合いをしました。

午後六時三十分からは会場を移しての夕食です。ワインで乾杯の後「てんぷら」の食事に舌鼓を打ちました。ビールやお酒が程よく回ったところでカラオケ大会がはじまりました。出場者が各県から持ち寄った商品が渡されましたが、長野県の参加者には三つの賞品が集まりました。ちなみに茨城県からは「水戸納豆」の賞品が出ました。

二日目は湯の湖一周四キロのハイキングです。きれいに澄んだ水と木漏れ日に光る木々の緑と青空そして樹木の間を吹き渡る風もさわやかです。途中湯滝の景観にはみんなで歓声を上げました。一周した後おにぎりの昼食です。心地良い汗を流した後の冷たい水が大変おいしかったのが印象的でした。午後十二時予定の行事を無事終了した後、これからも一段と交流を深めることを約束して帰路につきましました。

石川勇吉さん さようなら

石川さんの思い出

東腎協会長 泉山 知威

透折十七年を経て色々な人との別れがありました。東腎協会長にかぎっても初代寺田修治さん、二代目石坂一男さん、三代目宝生和男さん、そしてこの度亡くなられた四代目の石川勇吉さんと、皆さんそれぞれ精一杯活躍されて散っていったとの感は拭きません。

石川さんが東腎協に出てくるきっかけは、宝生さんと同じ病院で引張り出されてきたからだと記憶しております。なにしろ経理には



会員文流会で熱っぽく話す

大変うるさい人だと思いました。あれから十三年を経過し、この数年はきつそうなたが多くなっていますか」と声をかけることが多々ありました。

石川さんが亡くなられた七月九日は、東腎協の東部患者会交流会が開催され、石川さんも私も出席しておりました。私は「石川さん、今日は元氣そうですね」と声をかけますと、「新しい葉を飲みだしてから調子が良いんだよ」と機嫌の良い声が返ってきました。その日のうちに亡くなられたと本当信じられない気持ちです。

宝生さんが急逝され次期会長に推されているとき、私は早速全腎協会長を引受けることになりました。全腎協幹事会の夜に出席中の東腎協役員が集まり、石川さんに東腎協会長をお願いし、また、全腎協副会長としても補佐していただくことになりました。そして、石川さんの後に東腎協会長を引受けることになり、これも何かの縁ではなかったかと思っております。

大変失礼ですが石川さんはお年の割に気持が若く、精一杯生きて来られたのではないかと思います。多分、ご本人は自分の生きかたにたいし、満足して逝かれたのではないかと思っております。東腎協の役員も増え活動も活発になっております。どうぞ安心して安らかにやすみください。

これからの運動を前進させるために

常任幹事 中田 青攻

石川さんが、患者運動に打込んだ情熱に対して私なりに敬意を表すると同時に、人生の生がいととして仲間の将来に向って、医療と福祉の充実を取組んで来られた経緯を私達は教訓としていかなければと考えて居ります。

ここ数年、須藤先生から、健康上を理由に再三に亘るドクターストップにも拘らず精力的に活動に尽くす姿を思い浮かべると我身に鞭打って、最後まで、その点を燃焼させた、一生ではなかったかと強く感じて居ります。

私達は、こうした先輩諸氏の歴史のドラマを無駄にすることな

く、これからも運動を前進させるために、多くの仲間と手を取り合って命と暮しを守っていくことを再確認したいと思えます。安らかに眠って下さい。

すべてが燃焼

副会長 一ノ清 明

石川さんとは役員会の席でお会いしたのが初めてで、当時会計をしておりましたが、会計報告などキチンとしており、几帳面な性格であったことが印象的でした。

石川さんは高齢になってからの透折導入にも拘らず頑張り、東腎協、全腎協、東難連の活動に十一年間重責を果されました。途中体調をくずしたこともありましたが亡くなる前日まで活動をしており、意志強固と言うか全てが燃焼したように思います。そして「自分の体を献体し」と遺言されており頭の下がる思いです。

今となつては聞くことも出来ませんが、旅行をしたときなど民芸品や旧所名跡について説明されていた様子が懐かしいです。

石川さん本当に長い間御苦勞様でした。

東腎協のよい

「お父さん」

全腎協事務局長 小林 孟史

ぼくが二十歳近くちがう石川さんはじめてあったときから好兄弟という印象だった。しかし、そのみかたとはひどく異なる面を時

にみせることがあった。

凝り症というのか、若いものに負けたくないということなのか、失礼ながらお年齢のわりには新しいものにも迷いなく挑戦する姿勢にいつも敬服させられていた。地域の患者会をつくり、手書きの会

石川勇吉氏役員歴

年 度	東腎協	全腎協	東難連
昭和52年度	計	計	
53年度	事務局長	会計監査	
54年度	事務局長	会計監査	
55年度	事務局長	会計監査	
56年度	事務局長	会計監査	
57年度	計	運営委員(渉外部長)	
58年度	計	副会長	
59年度	常任幹事	副会長	
60年度	常任幹事	副会長	
61年度	会長	副会長	
62年度	会長	副会長	
63年度	会長	副会長	
平成元年度	相談役	副会長	運営委員

報をほとんど一人でながいこと発行しておられた。文章はさきもあつたが、そのレイアウトのセンスが

若々しいのにも感心させられた。いまほど普及していない頃のワープロにも挑戦し、いろいろな資料をつくっておられた。

はじめの頃は気短かなところもみせて、役員会などで激昂される場面もあったが、若い人たちの中心の東腎協役員の「良いお父さん」役も果していたように思う。

全腎協では副会長として五年間働いていたのだが、関東プロックのまとめ役として、時に会長の代行として運動の先頭になつていたのだ。

笑顔が何ともいえず優しい、夫婦仲のよい、そしておしやれな石川さんには個人的にもたいへんお世話になった。石川さんの本当に突然の死

に只ただ驚いて

勉強家の石川さん

常任幹事 石川 みさ

私が石川前会長に初めて出逢ったのは、東腎協常任幹事会の時でした。それから八年余りになります。ずいぶん色々とお世話になりました。石川さんは、とても勉強家で病氣のこと以外にも沢山お教え

て頂きました。あまりにも突然の死だったので本当に驚きました。七月九日、日曜日東部ブロック交流会には元気でした。いえいつ

もより元氣に見えました。それなのにその日の内に亡くなるなんて、とても信じられません。活動をしながらの死でした。それにしても亡くなられてからも献体をしたと聞きました。本当に頭の下る思いです。どうぞ安らかに眠り下さい。さようなら。

前会長を偲んで

副会長 糸賀 久夫

石川前会長とは、私がまだ二十代で透析導入後、まもない頃から東腎協の役員会で知り合い御指導をいただけてきました。

石川前会長はいつでも、カバンの中にいろいろな分野の本をいれ

ており、大変幅広い知識を持っていました。

「まだまだ若い者には負けられない」と都庁や病院まわりを精力的に行なっている姿には、頭が下がりました。お亡くなられる、直前まで患者会活動をしていたことを聞き、強く胸を打れました。石川前会長の活動を今後引き継ぎ、頑張りたいと思います。御冥福をお祈り申し上げます。

いつも前向きに

事務局長次長 草間 和男

石川さんとの出会いは、嬉泉病院で石川さんが透析を始める直前の腎不全で苦しんでいる時だった。心臓が大きくなり(心胸比65%)苦しそうだったが、故宝生さんと私と三人で熱く、良く話し合ったものである。確か一九七六年の春だったと思う。

このように石川さんは体調が悪い時でも、いつでも前向きな気持ちで患者運動に取り組んできた。また新しいことにも積極的に取り組む、高齢でありながら若い者に負けない気力を持っていた。

石川さん安らかに。

石川勇吉相談役の 死を悼む

副会長 柳 光夫

私と石川さんとの出会いは、昭和五十八年二月の幹事会です。

現会長の泉山さんが、全腎協会に就任された際、我々が、東腎協の会長就任をお願いしたとき快く引き受けてくれたことを今でも印象深く思い出されます。石川さんとの個人的な付き合いはなく、患者会活動を通して石川さんの姿を見たとき自分の体調も崩りみず東腎協の会合や行事には必ず出席し自分の意見を押し付けることなく広く意見を聞く態度に石川さんの人間性の一面をかいま見た思いです。また命が尽きるまで東腎協の将来を思い活動してきた姿には頭が下がります。私には父がおらず何か父を無くした思いです。

いろいろ教えて いただきました

副会長 高橋勇二郎

石川さんとは、区東部患者会交流会の後、お茶を飲み、秋葉原駅で別れました。その晩、ほんの数時間後に、元気だった人と、永遠

のお別れになるとは、だれが考えたいでしょう。病気の恐ろしさを思うとともに、もつとやさしくしてあげられなかったかと残念です。

石川さんは年齢を感じさせな若さがあり、ワープロを覚え、一人で役員のための資料を作ってこられるなど、積極的で勉強熱心でした。私とは、全腎協の会合などで地方によく一緒にさせていただきましたが、石川さんは歴史に詳しく、いろいろ案内していただきました。人生についても教えられる所が多く、これからも相談したいと思っていました。残念です。ご冥福をお祈り申し上げます。



腎移植推進キャンペーンであいさつ

石川さんの遺志に 添うように

常任幹事 木村 妙子

鮮やかな思い出としてよみがえる石川さんのお姿は、私が東腎協の常任幹事となって初めて、国会請願署名運動に参加した時のことです。

白髪をオールバックになでつけ小柄なお身体のどこにこんなエネルギーがと、思うほどのお元気さで議員会館の中を走るように歩いていられました。まだ体力のなかつた私については行くのがやつとで、早くあのように元気になりたといと感心したのを覚えています。その石川さんの突然のご逝去は当日一緒に活動していたので、今でも本当のことと思えません。ただ、ただ残念でなりません。ご遺志に添うよう会の活動を活発にしていきたいと思います。

石川さんを目標に

事務局長 森 善昭

石川さん、石川さんが逝ってしまったとの訃報が中田常任幹事から入ったときあまりに突然のこととても信じられませんでした。

石川さんは少し気の短いところがありました。勉強家で、努力家で、そして、お年の割には非常に若々しい活動家でした。私はいつも石川さんを目標に今までやってきました。

気が短いと言えばあれは全腎協の十周年記念総会のときでしたね。やはり今は既に亡くなられた池井さんと救護班のことでトラブルを起こしましたね。役員一同大あわてで引き止めたものです。

しかし、最近は何の話もよく聞け、聞き会長であり、相談役でした。そして、お亡くなりになる数時間前まで、患者会活動に打ち込んでおられ、正に殉職とも言える壮烈な死でした。

石川さん、今はもうゆっくりお眠りください。私たちは石川さんの意をつぎ、私たちの運動のために頑張ります。長いあいだ本当にありがとうございました。

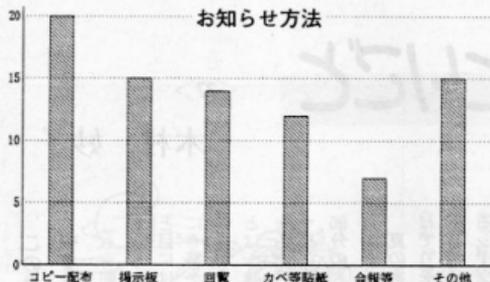
石川さん 長い間ご
苦勞さまでした。
ごめいふくを心から
お祈り致します

活動の調査結果

前回は各会のおもな活動について紹介しましたが、今回は病院側との対応について紹介します。

調査結果

1、会員への決定事項などのお知らせ方法は…



会員への決定事項のお知らせ方法としてはコピー配付、掲示板、回覧などがあり、コピー配付によって趣旨の徹底をはかっている患者会が増えています。役員の方々がワープロなどを使って何とか会員に伝えようという意識がみられます。

2、病院側に対する苦情、注文の処理はどうしていますか。

〈伝達方法〉

患者会数

① 役員がスタッフに伝える 24
 ② 総会、役員会等の会合で伝える 9
 ③ 個人的に各自で伝える 9
 ④ 重要なものは文書で伝える 5
 ⑤ 何もしていない 5
 ⑥ 苦情がない 4
 ⑦ 無回答 8

病院に対する苦情、注文の処理については、役員会などであり

げから組織として病院側に伝えるに患者会が多くなります。

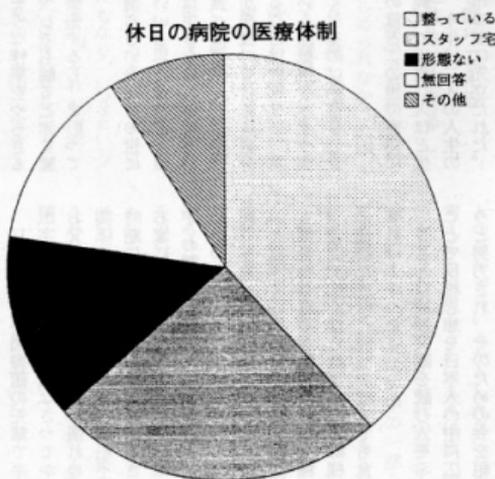
3、休日の病院の医療体制（救急体制）はどうなっていますか。

〈項目〉

- ① 救急体制整っている 22
 ② スタッフ宅に連絡する 14
 ③ はっきりとした形態ない 8

患者会数

休日の病院の医療体制



④ 無回答 8
 ⑤ 入院設備のある病院に緊急連絡

⑥ 内科外科で対応 救急体制については、しっかりとした体制が出来ているところが多いが、はっきりとした形態のない病院が八施設あり、改善が必要とされます。

たとえこのひとと

〈27〉

木村 妙子

この世の害毒に侵され
やすい美しいもの弱いもの

もう朝夕には秋風が窓ガラスを鳴らすようになった。昔の人が、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬる」と詠ったとおり、秋の風が立てる音はやはり他の季節の時とは一味ちがう音だ。カタカタとなんとも言えない心細い気持ちになる。もつとも最近ではアルミサツツなので、大部分の人は秋の寂しさを感じることもないだろうが。

夏あの明るさはもうない。日中のほてりを静めるような夜風の涼しさに窓を明けて、味わったり、ヒヤツとするシートに横たわり、窓を明けて、月が東から西へいつの間にか移っていくのを眺めて夜風に吹かれ、蚊取線香の匂いと植木の香りの混じった夜気を呼吸している夏の夜も来年までお別れだ。

今年の夏は夏らしい夏だった。真夏日が続き雨もよく降ったが、日もよく照った。暑いのは好きだから平気だが、虫が多かったのは大変だった。チャドクガという虫が東京近郊で大発生したということが新聞にも報道されていた。梅の木に三度ぐらい発生して、兄弟夫婦が消毒するのに大苦勞をした。一度は私も毛虫がもじやもじやと蠢めい

ている枝を切り落とし殺虫液に漬けるという吐気が出そうな作業をやらざるを得なかった。少しでも触ると赤く腫れてしまうので緊張するし、まいつてしまった。

こんな害虫は憎らしいからこの世に生まれなければいいと思うけれど、虫も生まれた以上は生きなければ仕方ないから、葉を食べる。生きと仕げる者の宿命で何かを食べなければ自分の生命を維持することはできない。黙々と食べられている無抵抗な木々や葉っぱに味方したくなるのは判官びきのせいだろうか。

美しく弱いものほどこの世の害毒に侵されやすい。純真で正直な人ほど生きにくいように。今年は二人の人生に先輩と一人の同年の友に先立たれた。お二人のことは各々、敬意を持ち、お慕いもしてもいた。年明け早々と夏の初めにあの世へ行ってしまわれた。友はほんの五日前に還らぬ人となつてしまった。

死と正面から立ち向かうUさん、Nさんのこと

患者会の会報に死の話はふさわしくないとと思う人もいるかもしれないが、避けて通れないことなら真正面から立ち向かう方が賢明だということは古く

からの鉄則だ。

Uさんは点字図書館の先輩で半生を点字教育に捧げ、退職なさってからはお父様の事業を引き継いで慣れぬ造船関係の会社のトップとして造船不況の時期に苦勞された。最近引退されてお家にいらしたが、年に二度か三度だが、お電話で話す度に弱っていくのが、わかった。なにしろ何も食べられず、何も食っていいのに食べる気がしないと言っていた。そのために水分も何もかも取らなかつたので一種のショックで亡くなられたとお姉様からの連絡だった。押しかけてでも食べさせればよかった。

Nさんは原爆文庫を読む人をふやすことで反核思想を日本人の中に広めようと努力され、そのための会を組織したり、資料を図書館に寄付されたり真面目な活動を続けていらした。

八月になるとM新聞の文芸欄に毎年のように原爆文庫のリストを発表されていた。詩人であつて猫の詩集を送つて下さつたりした。この、十年は年賀状のやりとりだけで、お目にかかつたことはなかつたが、文面でまたヤセたとか書かれてあつて、いつも気になり図太く生きて下さいとか凡人の鈍さを發揮して慰めの葉書をお出ししたりしていた。でも役に立たず、自ら生命



え・山中 知子

を断つてしまわれた。なぜ強く生きて下さらなかったのか。
前のお二人は私はずっと年上で六十歳を超えた方と五十歳代の終わりかと思う。最近亡くなった友は大学のマンドリンクラブで一緒にいた。その後もずっと私が卒業して三年で再発してからも親身につきあいを続け、透析を導入した時は血液手帳の手配に尽力してくれた。(昔は大変だった)
八月末にご主人が急死され、道子さんはずっと、四年前から闘病中だった。私の母も軽い病気ではあるが入院したりして、思うようにお見舞も行けなかったのが、心残りだ。十五日に行

った時には、「二十日からは八階に移るから。でもお母様の方看病してあげて」といつものように自分のことより私の身体のことや母のことを心配してくれていた。

ばらの花のような人だった。美しいけれど理知的でそれなのにちよっとそそかしいところもあり、ヤセているのにお肉が好きで、レストランで食事すると私はいつもカニコロケで彼女はすぐハンバーグステーキとか、ポークジンジャーを食べた。

死の悲しみを乗りこえる

死をも超えた共生に生きる

お通夜、告別式と夢中で参列したから、悲しみをかみしめられなかったが、こうして、虫のすだく夜、考えているとこの世に存在していないということ

が、本当に辛い。彼女が結婚してからはご主人が医師で開業したりで多忙を極め、育児、育児、主婦業、病院経営と目の廻るような忙しきで、顔を会わせてゆっくり話することもなかった。でも、この世にいるということはなんとなく頼りにもなり、いざという時はいつでも、会えた。それが幽明、境を異にするこんな寂しいものか。でも、彼女は私の心の中に生きて

お嬢さんをお二人の残されたが、下の中のお嬢さんが彼女を甘えんぼうにさせたようなそっくりなお顔で、お棺を花で埋めていた姿が忘れられない。子供は分身というが本当にそういう気がした。彼女の何分の一かは遺伝子として子に受けつがれているのだろう。

しかし、何代かたつと血は拡散する。反対に言えば、私の血肉の中には何代か前の何人もの血が流れている。もしかしたら彼女の何代か前はどこかで私とつながっているかもしれない。こう考えると少なくとも日本人は皆、親類のようなものだ。一人の死の悲しみを乗りこえるには全体の中の一部として、死をも超えた共生に生きるしかないと思う。

病友の死もまた身近だけに悲しいし、打撃であるが、やはり、彼女の苦しみ、喜びを共にすることができて、その後の生を引き受けることができる。彼、彼女を心の中に取り込んで、その分まで生きること、彼らが望んだものを表現し、忌避したものをなくしていくように生きることができるとかどうかわからないが、その時がくるまで精一杯生きてみよう。

一九八九年九月二十四日

会員さん訪問〈35〉

明るく健康な日に 母からの腎臓移植を受けて

柴田 千恵子さん

明るさが開き手の体を突き抜けていきます。病氣持ち特有の暗さを微塵も感じさせない、これが果たして透析から移植を経験した方であろうか、と思わせる人、柴田千恵子さん（二十七歳、東腎協個人会員）にお会いして、お話をうかがいました。

入院して二日で透析

柴田 一九八一年（昭和五十六年）十一月四日から透析を始めたのですが、入院したのがその二日前の二日のこと。入院までもなく、意識不明となり、腎臓が危険な状態とのことです。尿毒症を起こしていたのです。救急病院から大和病院（板橋区）へ移り、危篤となりましたが、どうにか命を取り止めることができました。

症状が落ち着かないので、シャントがすぐつくれず、股間静脈にカテーテルを入れて透析をするシヨルドンという方法を続けました。十二月初めシャントができて血管が太らず、普通の透析ができるまで三か月もかかってしまいました。

腎臓が悪いなんて、いわれたことは一度もなく、入院の一週間前までレストラン勤めをしていました。十月初めのことでした、手が

つったり、関節が痛むので医師の診察を受けましたら、痛風と診断されました。肉類をたべずに、水をたくさん飲むよう勧められました。

た。あとで考えるとそれも悪かったでしょう。勤めも忙しく、立ちん坊で働き、休みも取れない状態が続き、とうとう風邪をひいて三十九度近い熱が下がらず、救急車で入院したのです。

過労と風邪が引き金になったのですが、医師の先生も初めは急性腎不全で治るケースと思っていたくらいでした。

それから四年五か月、週二回の透析生活が続きました。私の母（良子さん、五十九歳）は地震などの災害のことを心配して、片方の腎臓をあげるといってくれました。災害で透析ができなくなったら大変というのが母の心配の種でした。本当にありがたいことでした。

移植手術は大和病院の紹介を受け、一九八六年（昭和六十一年）四月十七日、東京女子医大で行いました。その年、同医大で行った

移植手術は百六件、そのうち生体腎八十六件、死体腎二十件。生体腎は母親からというケースが圧倒的に多かったようです。手術はおせおせで予定より半年延びました。早く移植をうけたいという気持ちでした。この半年は本当に長く感じました。

当初はドナー（臓器提供者）に健保の適用ができず、借金覚悟で移植手術を受けるつもりでしたが、ちょうど制度が変わって私移植者（の保険で移植ができるようになったのは本当にラッキーでした）。

――移植後の生活はいかがでしたか。

色の着いた尿が出た

柴田 退院して三か月ぐらいは体の抵抗力が弱いので、人ごみに出ないようにしました。外出しなければならぬ時はマスクをかけ、とくに風邪に気をつけました。でも時間に拘束されない生活、食事制限のない生活は素晴らしいですね。

移植後初めて歩いたとき、移植した右腹が重い感じというのか、何か違和感がありました。免疫抑

制剤はずっとのみ続けています。

——移植を実感されたことは。

柴田 私は透析中も尿は出ていたのですが、腎臓がまったく働いていないので、無色透明の尿でした。それが移植手術後たしか六日目のことですが、トイレで色の着いた尿をこの目で見た感激は忘れられません。もう一つ、透析生活中はみそ汁の中身だけを食べていたのが、なみなみとおつゆの入ったみそ汁をのんだ時のおいしかったこと、忘れられませんね。食事制限のないことは本当にうれしいことです。

——移植、脳死についてのお考えを。

柴田 移植はどんどんできるようになってほしいですね。私は透析も他人から見ると、さほど苦痛ではなかったように思います。四年五か月程度の透析で本当の苦勞も知らずに……といわれるかもしれませんが、私自身は結構楽しく病気が付き合っていたつもりです。透析は一生続けなければならぬのですから、落ち込まず、ある程度居直って明るく、病氣と付き合っ

てもできることなら移植した方が

が明るくなりますね。皆が移植できて、健康体になってほしいものです。脳死は社会的になかなか受け入れられないでしょう。心臓、肝臓の移植には脳死は必要条件ではないと思うので、腎バンク登録がもっと簡単にできるようにしてほしいものです。

——患者会運動の評価を。

運動継続こそ最大のメリット

柴田 組織があったからこそ、今日の透析治療があるのです。いま公費負担で治療が受けられているのが当たり前のように思われていますが、これまでもつてくるまでの努力は大変なものだったと思います。国が金を出してくれるんだから、患者会にはいつでもメリット



患者運動、腎移植を語る柴田さん

はなにも無い、という人もいますが、いまの透析治療の体制が最大のメリットではないでしょうか。一人ひとりが、なぜ運動を続けなければならぬのか、をよく考えてみてほしいのです。

私は透析時代は大和病院の透析友の会から、東腎協の常任幹事を二年間勤めさせていただきました。東京女子医大には腎臓移植手術を受けた希望者で結成された「東京キッド」という移植者友の会があります。会員は全国に散らばっていますが、地方の組織との交流会もあって、病院側も積極的に協力してくれています。私も腎臓を大切に、元気で頑張りたいと思います。

透析には暗いイメージがつきまとうのは、止むをえないことかもしれませんが、笑顔をやさしく話してくれる柴田さんの「みんなが移植できて健康体になっしてほしい」という願いの中に、苦しくて、明日を信じて明るく生きていかねば……という信念が、はつきりと読みとれました。暗いイメージは気持ちの持ち方で払拭できるはず。 (文と写真、小脇)

知っておこう全腎協の歴史 (第4回)

腎臓病と全腎協

全腎協事務局長 小林 孟史

透析患者8万人で
4千億円の医療費

最大の問題になるのが医療費です。透析患者八万人で四千億円の医療費を使っているといわれています。お手元の読売新聞の切り抜きにある腎不全対策推進会議の報告書の中であまりふれていなかったと思うのですが、この原文の審議過程でこの前文の中で大変な論議になりました。

事務当局である厚生省は、この中に透析患者がどんどん増えていくということを書いています。

この「人工透析に要する総医療費は相当多額になり、この趨勢は当分続く」ということが予想される」ということで、当初の原案では、「したがって透析医療費を抑制するためにも、腎不全対策の抜本的な在り方の見直しが必要だ」ということが書いてあったので、これはおかしいのではないかと、透析費が増加するから腎不全対策を抜本的に見直すというのは本末転倒ではないかと。

透析を受けているということ、いくら技術が良くなったって一回、四時間、五時間ベッドにし

ばりつけなければならぬわけがない、週二回から三回、生涯にわたって病院に行かなければならない。そのことに伴う肉体的精神的社会的な制約ということから開放するためにこそ腎不全対策の抜本的な在り方を見直されなければならないし、そのような苦痛を伴う治療を受けざるを得なくなる透析患者を減らすために腎不全対策が抜本的に見直されなければならないにもかかわらず、透析医療費の額が大幅に増加するから腎不全対策を見直さなければいけないというのは本末転倒だということである。これは本末転倒だということである。これは本末転倒だということである。これは本末転倒だということである。

大論議というところちょっと大きなのですが、ややエキサイトした場面がありまして、最終的にはこの現状認識の中では、総医療費が増えてこの状況が当分続くということが予想されるが、透析患者の肉体的、精神的苦痛の解消や「医療資源の有効な活用」という、なかなかうまく言葉を使っているのだから、「医療資源の有効活用の観点からも腎不全対策の在り方を抜本的に強化することが必要だ」というふうに着目したのです。

つまり厚生省の方ではそれはもう盛んに言うわけですけれども、八万人の患者で四千億円使っているということについてかなりの危機感を持っている。とりわけ大蔵省あたりでは、そのことについておそらく厚生省の担当課に相当いろいろ言うのでしよう。

患者の幸せのための
腎不全対策、腎移植

それでは、テーマの副題のほうに入るわけですけれども、四千億円かかるから腎不全対策を見直さなければいけないのではないかと、四千億円使っているから腎移植を進めなきゃいけないんじゃないんです。結果として四千億円が削減されれば、それはそれで結構なんですけれども、大事なのは患者の幸せのためというのか、そのために腎不全対策なり腎移植なりが見直されなければ、あるいは、対策の強化がなければならぬだろうと私は思います。

ところが、現状は必ずしもそうならないという状況。幾つかいろいろなたちの話や、本なんかで、今の厚生省の話で言われているところをちょっと幾つか出して

みます。一つは、毎年新たに一万四千人、一万五千人透析を始めるわけですからね。その一方で、外来の透析をやっている皆さんには直接的には今の時点で関係ないですが、入院病床を規制していくという、つまり施設から外へというのが基本ですから、透析病院はこれ以上なかなか増えにくいでしょう。

診療報酬の面でもいろいろ抑えつけてられていますから病院経営は大変ですから、透析病院はあんまり増えない。あるいは、透析ベットを増やさないとという傾向が出てきます。都市部では逆に増床という傾向もあるんですが。

で、全国的には透析病院が満床になっていくであろうと。新たに透析を必要とする人が出てきても、それを受け入れる条件がだんだんと昔と比べて減ってくるのではないかと。更に一番最初にお話した全腎協が結成当時のような状況にまではならないにしても、それに近いような状況が出てくるかも知れないという危機感ももう既に昨日今日の話ではなくて、随分前から出されています。全腎協でもそのことを訴えてきましたけ

れども、日本透析療法学会が毎年総会で発表する「我国の透析療法の現況」の中に最大収容能力、今、人工腎臓が全国で何台ありますよ、あと何年分使えますよというものを都道府県別に出しているす。

つまり、お医者さん方の学会の中でもそういう危機感というものは非常に強まっている。ある地域では、もう数年前ですけれども本当に満床状態に近くなって、かなり離れた所に行かなければ透析が出来ないという状況も一時的には生まれています。

それから、よく言われるのは、さっきの厚生省の論議にあったように、四千億円ということですが、これは国民総医療費が十七兆円とか言われています。どんでん膨らんでいくと言われていますが、八万人と言つと、例えば国民八人に一人が何らかの形で病気またはケガをしているというのが厚生省の患者調査で発表される数字です。それから計算していくと透析患者数というのは、患者の中言えは〇・一％ぐらいですか。ところが、医療費の面で見ると全医療費、保険も自己負担も全部

入ったその十七兆円の中で二％。今、総額は増えていきますから相対的にそのパーセンテージが減ってきますけれど、二％近くを使っていると言っています。これは、もう大変なことだ。だから移植を進めなくてはいけない、家庭透析を進めなくてはいけない、CAPDを進めて医療費を節約しなければいけないところから出てきたりしている。透析医療費亡国論など、これは七、八年前、あるいはもっと前でしようか、そんなことが言われた時代もありました。

次々と打ち出される患者への自己負担の強化

診療報酬合理化論というのは、全腎協が大運動をやりました。ご承知の方もいらっしゃると思いますが、俗にいう「まるめ」、「件数払い」というのが厚生省から全腎協の公式の陳情の席上で出されたことがあります。

この「件数払い」というのは、例えば血液浄化法をどんな種類でやろうと、どんなダイアライザーを使おうと週に二回だろうと三回だろうと、灌流液をどの程度使う

か、とにかく中身にかかわらず人工腎臓については、一月月例えば四十万円なら四十万円、さっきの福祉医療制度の話と同じなんです。が、四十万円の枠内でやりなさいよ、とにかく一カ月総額で四十万円病院にあげますということですね。その中でやりなさいと。

そうすると、AさんとBさんと症状は違うわけでしょう。で、透析歴も違うし合併症のあるなしも違うだろうし、体重の違いもあるだろう。つまり患者というのは腎不全の患者さんに限りませんけれども、全部個人差があるわけです。

それで、個別の症状の状況に見合った治療をするのが医療だと思つたのですが、そうじゃなくて本当に機械的に一律にこれはあくまでも保険上ですが、保険上はこれこれしか面倒はみませんよと、こういうような話が厚生省内で議論されているということを全腎協の陳情の際に、厚生省の担当者が我々に明らかにしたわけです。「それは本当ですか」「まじめに話をしているんですか」「そうだ」と。全腎協も大騒ぎをして全国にばつとその情報を流して厚生省に全国から抗議の電報が送られました

た。厚生省はあわて、しかも、ある国会議員の先生がその問題を取り上げて国会で質問をした結果、「そういうことは考えていません」「これからもやりません」と言ったんですが、やはり彼らが本当にそういう論議をしていたのは間違いないだろうと思いますね。

で、実は保険局長は国会の中で「やりません。今後もしやしません」と言ったにもかかわらず、その後公式ではないのか、非公式の場ではちろちろ出てくるんですね。従って、それぞれ病院の先生にお聞きになれば、あるいはそういう話が出てくるかも知れません。もうすぐ一年とか再来年当たりにも、「件数多い」が出てくるであろうということを感じている先生がいるんじゃないかと思えます。日本透析医学会の中にもそのことを当然の前提として、対応策が考えられているということをちろちろ耳にしたことがあります。そんなことで言いますと、このへんが一番やはり大きな問題だなあという気がします。

その次に患者自己負担分の強化論というのがもう一つあるわけです。先程も触れましたように血友病と並んで人工透析は、公費負担がなくても自己負担が一カ月最大一万円ぐらいのわけです。これは、最近変な話がありました。ある県の患者さんが更生医療を打ち切られるという話があったわけですね。で、これはちゃんとした福祉事務所長名で更生医療の給付を停止するという通知がきたわけですね。その患者さんは、自宅から遠く離れた、透析歴二十年近くになる患者さんですけども、俗にいう「社会的入院」なんです。自宅にはもう住んでなくて病院が住まいみたいになっていて、そこで生活し、三食は全部病院から出るわけですね。そういう長期の入院治療している患者さんについて、これはちょっと事情が複雑なんですけれども、何年か一回厚生省の審査があるんです。それにひっきりまめで、病院やなんかいろいろな資料を出させた結果、結局支給停止にすると。で、その理由が更生医療というのは、身体障害者福祉法という法律に基づいてやっていますからね。社会的に更生していく、自立更生していくのが本来であり、そのために医療を給付するというのが法律の建前にな

っているわけですね。

ですから、自立更生の意思のない人に、つまりずっと入院してものにそういうのをやる必要がないんじゃないかと。こういうことが一つの論理のようです。最終的にはこれを撤回させました。厚生省でも実はそういうことを想定した通知がちゃんと担当課の課長名で出されています。それを決定した福祉事務所長がよく読んでいなかったんだと思うんです。

人工透析については、特殊な療法的なので一律にあまり機械的にそれを適用するなという通知が出ている。そのところをみていなかったために、機械的に扱ったというところだろうと思うんですが、ただ、この考え方は、ある県の福祉事務所長がそういう決定を下した、その論理というのは、今後かなり出てくる可能性はあると思えますね。

そんなことで、今後患者への自己負担という問題が出てくる可能性があるというように思います。

安上がりの医療費

CAPDや家庭透析も

いろいろな論議もある中で、全体

として在宅療法の促進というのが、今、政府の方針ですから、CAPDは既に保険にも載っていますし、公費負担の対象にもなっています。家庭透析も保険適用させようことは、安全性の問題とか確信を持って認知できるまでに至っていないからという、まだまだこれは認められていませんけれども、次の診療報酬の改定があった時には家庭透析もおそらく入ってくるだろうと思います。

で、こういうものをどんどん進めていくということが可能性としては出てきます。保険点数上優遇し、病院で受ける透析については保険点数はなるべく安めに付けていくということが今後考えられると思います。

それから、人手不足の問題です。保険点数が安いですから病院に入ってくる収入はだんだん少なくなっています。従って、病院としては患者さんに自己負担をかけるわけにはいかないとしたらどこで節約するか。よくいわれる止血のためのカットボタンとかそういうものを自己負担させるとか、いろいろな自己負担があったりするようにす

が、そんなもんじやたかが知れているわけで、やはり一番の問題は人です。看護婦さんを減らす。今度新しく臨床工学技士法という法律ができ、テクニシャンという国家資格を持った医療従事者として病院の中に登場してきます。そうすると、そういう資格を持ったテクニシャンと看護婦さんとの仕事の内容というのは透析現場ではあまり変わらないのです。それぞれ専門職といえば看護婦と技術職、透析技士というのは本来違わなければいけないのですが、かなりその辺、境界領域といつてはいいけれども重なる部分がいっぱいあって、病院の中でなかなか難しい関係になってくると思います。

その際に病院経営者としては、やはり国家資格を持った人ですから一定の給料を払わなければいけないと。そういう人はあまり雇えないので、その分看護婦さんを減らしていくとか、そういうことが今後出てくる可能性があると思うのです。

は普通なのだそうです。ある建物の中に人工腎臓が置いてあって、何人かの医療従事者がいて、それで医師がいる所と全然ない所もあるようですけれど、そこへ行つてつまり家庭透析を病院でやるようなものなのです。全部穿刺からなから全部自分でやって、回収のときだけ病院のスタッフが手伝つてくれる。家庭透析の回収は、奥さんなりご主人なり家族が手伝うわけですから、スタッフは手伝つてくれるということ、こういうことにアメリカではなっているそうです。

アメリカでは医療費の仕組みが違いますから、かなり前からそういうものが入っているらしいのですが、日本でもこれを取り入れ、これに類する仕組みを取り入れる所があります。先生があまりいない。看護婦さんがいない。もちろんだ、状態のよい患者さんだけを選んでやっていられるのですが、ほとんど自分でやられる。プライミングなんてやるのはかなり当たり前という所も、最近では聞く例が多くなっています。そういう準備を全部患者にやらせるといふようなことも増えてきて、アメリカ並みの俗

にいうLCUが完全に日本に定着するかどうかというところは難しいところですね。ひよつとして、これが認知され、公のものとして認められるならば、家庭透析よりもこっちの方が普及するのではないかと思います。

高額医療の典型人工透析

「医療資源の有効な活用」

イギリスで透析六十歳年制という話があつて、ずいぶん多くの患者さんから全国的にお電話を頂いたり、お手紙を頂いたらと思う。かなり危機感があつたと思うのですが、日本でもこういう方法が公にどこかで線引きをすることはできないだろうけれども、事実上の線引きをせざるを得ないのでないかと、ごく最近、ある透析医の先生に伺いました。

それから「優先順位論」ですが、これは国立公衆衛生院というところのかなり偉い人が言いました。高額医療の典型として人工透析があげられていました。何も命がかかっているのは腎不全の患者だけではないでしょう。

ALS(筋萎縮性側索硬化症)なんて重症の病気があるのです

が、難病でやはり原因不明、治療法未確立、治療未確立で大変なものですけれど、それからほかにもガンの患者さんなど一番多いのですが、こういう人たちが沢山いるのではないかと。なんで腎不全にだけ高額なお金をかけてと。つまり基本的には保険料なり税金なわけですから自己負担が若干出たとしても、厚生省の報告書でいう「医療資源の有効な活用」ということになるでしょう。けれども、これだけの限られたパイをごく一部の人だけにあげていいのかと言う論議が今後、国民的レベルで起こってくることも、すでに十年前前に警告されています。社会保障関係の先生が言いました。

それで我々はその当時、大変反発したものですけれども、その人の考え方が正しい、間違っているかとはともかくとして、そういう論議が国民の中でひよつとしたら起こるかも知れない。国民レベルで起こるかも知れないということでは、ある程度認識しておいた方がいいのではないかとしようような気がします。

(一九八八年九月十八日 東腎協第二十一回幹事会で)(つづく)

のなまの たより

会員の皆さんから原稿を募集しています。うれしかった事や悲しかった事、苦しかった事などの随病記、ひとり言やカット、写真などなんでもお気軽にかいて事務局へ送って下さい

自然にこぼれる涙

くにたち桜会

松川 秀雄

「松川さん、ご飯ですよ」

チャージングな看護婦さんが、待つていた夕食（この食事は湯気の出ているご飯、それも茶碗によそって、オカユは季節感を盛った手作りのもの、ここへ来てから美味しく、一度も残したことがない）を持って来てくれた。すると「アッ、一寸待つて、松川さんには今日のご飯は無理かもしれない。オカユを作ろう。K子さん、紀の国屋（高級品専門店）へ行って煮干と、海苔の佃煮、梅干を買って来て！他の店ではダメよ！」

「私のために、わざわざオカユなんて、いいですよ」
「いいよ、事務長（透析歴十四年の患者さんで、病院のいたるところに、患者でなければ気がつかないような心配りがされている。広い更衣室の中にソファが置かれていたり、静かに流れる透析中の

BGMなど）さんが、こういう時のために、携帯用のガスコンロやナベを用意しておいてくれたんだから、なるまで、オカユでいまましょ」

と言いつつ、胃腸場を退院したばかりの私のために、三十分もかけて、オカユを作った。オカユの湯気が目にしみて、自然と涙がこぼれてくる。五人の患者に六人の看護婦さんたち、それも、五月の風のような、さわやかな看護婦さんたち、この人達に見守られて透析をして頂ける幸せをかみしめずには居られない。

「厚生を心掛けて、二度と胃をこわさないようにしなければ、私は心に固く誓った。」

12日間二人旅より

あけぼの友の会

岩本美津枝

二時、透析を終え、しつかりと水を引き、代わり旅への夢を膨らませた女性二人は乗るブルートレーン「北斗星」は、五十分上野駅を出発、

北海道への旅は始まった。

奮発しただけあって個室寝台はまさに動くホテル。他人の目をきにしないのが女性にはうれしい。「青函トンネル」も興味の一つ。列車の旅をあえて選んだのだが、上は海かと想像するところが上り不安になる。以前は深夜青森で乗りかえ、連絡船に揺られること四時間、朝もやの中に函館山が霞み、ああ着いたなあどホッとしたものだ。今はその景観の無いのは少し寂しいが、何といつても一度の乗りかえも無いのが有難い。「ハコダテー、ハコダテー」ゆつたりと、なまりのある声がホームに流れ北海道への実感を味わう。

早速、五時から開くという朝市へ、あるわ、あるわ、見渡す限り。カニ、メロン、生きたイカから干物まで、さすが本場だ。

先ずは名物の、いか刺に、シヤケの腹す朝食、なんと美味しいこと。お腹を満たしたところで市内観光バスで五稜郭公園から、広大な緑に包

まれて立つトラビスタヌ女子修道院へ、折りで始まり折りで終る、牛を飼い、作物を作り自給自足の生活だと聞く、感慨を残して、啄木が歌碑の立ちたとして、砂浜に歌碑の立つ公園へ、遠く津軽半島を望み、かの有名な津軽の歌々を詠んだのかと思ひ、巡らす間に、バスは白い教会の点在する坂の上の町へとどまり、洋館を背に緑台で、かき氷の味もまた、忘れられない。

世界にも誇るという函館山からの夜景は素晴らしい、あの大白鳥が寶石を身に纏い思い切り羽を広げたことくでも言おうか、眼下に広がりしばし魅せられる。

去りがたい思いでプラタナスの並木を下ると、そこは、港に並ぶ赤レンガの倉庫を改造した、しやれたピヤホールやレストラン。いま一番若者に人気があるとのこと。

「カンパニー」旅情に酔う二人。

翌日は、大沼公園、洞爺湖

とハードステージュールだが、東洋一といわれる登別温泉で、疲れを癒す。

三日目にいよいよ透析、同行の彼女（塚田さん）は、あけぼの病院以外で受けるのは全く初めてとあって大丈夫かなア、としきりに心配する。

大きな総合病院（室蘭日鋼病院）明るい透析室へ案内され、恐る恐る計りにのる。デジタルは容赦なし、あ、四キロ……水も美味しかったし食べ物も……免じて下さい。先生らしい人は見当ず、穿針は婦長さん、金属針で、幅広のパンソウコウで固定するので抜ける心配もなさそう。

次々とスタッフが顔をだす。「コワクナイカイ」「コワクナイカイ」何、恐ろしい？「誰が？ スタッフ？」（と）は言いません、あ、ツギが付きました、そおなんです、懐しい北海道弁なのです。「コワクナイカイ」は、苦しい・疲れない、の意味なのです。

そんな訳で、北海道弁での会話が弾む、隣りの彼女もト

ラブルも無く安心。

旅行中、旭川・釧路・北見と五カ所の施設を利用したが、どこも車重透析・機械も除水行付きで、設備の良さを感ずる。大体が四時間透析だが、私達は五時間受けることができたのは有難い。

透析を盛り込んだ旅行企画には苦労したが、これもまた楽しいもの。旅はつづき、メインでもある、ラベンダーの薫りのただよ、メルヘンの世界へさそわれる富良野、釧路川の流を抱いて広がる大湿原に原始の姿を想い。阿寒湖、藍色に染める神祕の摩周湖に感動を受け、晴天にも恵まれた十二日間の旅は、無事に完了。友も良かった良かったかと、大満足、広い空と海太陽と緑一人で多くの仲間が味い合うことができたならと思う。透析導入期には思いもよらなかつた、幸せを、今ひしひしと感じ、生きることの喜びと感謝の気持ちでいっぱいです。

交流会に参加して

埴友草加病院

内田 祐吉

幹事の皆様方御苦労様です。いつも色々な企画をして戴きありがとうございます。大変愉快に病気のことも忘れて楽しい一日でした。

又、神代植物公園に初めて行きましたが、広い公園に色々の花が奇麗に咲いてとても気持ちの良い一日でした。食事には神代そばを戴きながら顔なじみの方にお会いして透析の管理のお話はずんでビールのおまさがこらえきれなかつたです。ただ残念なことには、食事の部屋に全部の皆さんが一度に入りきれなかつたことがあります。

日本一の「袋田の滝」

新松山病院

永井 明

久慈川の支流滝川にのぞむ丘上に位置する、袋田温泉。庄巻はなんといつても、「袋田の滝」である。

月居山、生瀬富士などに囲まれ、そそり立つ絶壁より轟音を吹き散らし、落花する水量の豊富さは、一瞬、息を呑むの感がある。

なんと豪快な絶景であろうか、これぞまさしく、日本一の滝だ。

しばし佇みながら吾を忘れ幽境に浸り、只、茫然あるのみ。

過ぎし今、想い出すだけに心爽やかな事か。帰りの路、久慈川のアユの塩焼きを一尾、求めて塩氣を手で叩き落しながら、ほほほりし、あの味、また格別な思い出として残る。今、現象せし数々のフオー



会場は熱気でいっぱい



永井さん（左）と会長

ト眺めつつ感慨も一人である。企画された、幹事諸兄へ深甚なる敬意を表します。

それにしても、会長のあの嬌々として微笑を満面にたたえながらの、気配り、心配りには、終始、爽快な一日の旅を満喫し得た喜びは忘れられない。

ありがとうございました。九月三十日於自宅

奇遇

須田クリニック

白井 次郎

東腎協の会報紙に、三年前ハワイへ行つたときの私の小文が載つたら、東京多摩の杉本さんという女性から、ホノ



杉本さん（透析中）と一緒に

ルル市での透析は？と問い合せがあつて、詳しく教えてあげたら早速出掛けた。昨年の春にバリのエッフェル塔をバックにした杉本さんの写真が送られてきて驚いた——ヘエーッ、ヨーロッパまで——と羨ましかった。

今年の孫たちの春休みに、オーストラリアへ行こうと話しが出たが、やはりワイキキのホテルのプールや、奇麗な海の方がいいと私の提案で変更した。仕度をしていると杉本さんもご主人とハワイへ行くといい。一日遅れの出発だけれど、ホノルルで会えるかも知れないと思つた。

ホノルルに着いた翌日が透

析、連絡が不充分だったのか午後を希望したのに午前とか、急いで病院へ。病院の送り迎えのクルマのドライバーは三年前お世話になった二世の石田さんで、思わぬ再会に驚きも、嬉しかった。

透析をはじめて隣の椅子に女の人が入つて来た。髪が黒い。ナースに「日本人ですか」と聞いたら、「そうだ」と返ってきた。じゃ名前は？ 驚いたことに「スギモト」と答える。会えるかも知れないと思つていが全く奇遇である。杉本さんもビックリした顔でこつちを向いて、写真では会つてはいるけれど双方とも初対面である。東京で会つてなく

てこんな所であろうとは。そのうちご主人らしい人が来る。ご主人も初対面、カメラのシャッターをしきりに切つてい

た。昼食時になる。この前の病院は何も食べるものを出さなかつたから、その心算でいた、ナースが「エイツ（食べなさいヨ）」といつてバックに入つたものを持ってきて小さなテーブルも置いてくる。ナニかなと思つてみたら握飯であつた。それに沢庵まで添えて、ティバックだがお茶も紙コップに持ってきてくれて気が利いている。

回収が実に手取り早い。食塩水の入ったバックをキューッと絞る。バンドエイドの様なものをつけて、長いビニールテープでグルグル巻いて終わり。これで大丈夫なのかと思うくらいだった。——スモーキング——と言つて急いで隣室に行つて一服してホツとした。

今度のホテルは、ハワイアン、ヒルトン、グレージュで大きなホテルだ。校内の別棟に

種々店がある。貴金属、骨董品、カメラ店、料理屋、それに美容院まであつて小さな街の様だ。この間に大きな椰子の木があり、植え込みの緑が美しい。その周りは色鮮やかな花であつた。プールも大きい。プールサイドで昼食のとき一杯のビールは爽に旨い。海は青く砂浜は塵一つ落ちていない。日本の海水浴場の様にガンガンと変な音楽がなく、青く澄んだ空を寝転んで眺めていると、これが天国のかなと思つた。

夜になるとホテルの構内に松明の様な灯が椰子の間に点々と光り、黒い夜のなかで幻想的であつた。二回目はハワイ透析センターというところ、ここは全く日本語が通じなくて閉口、その故で血圧が上がつて、ドクターが心配して何回も血圧を計つてくれた。又、この病院で杉本さんと一緒、彼女は早く来たらしい。ホールで二回も会うなんて奇遇とはこのことだ。

最終日の晩、このホテル専

用のヨットで、ワイキキの海へ出た。丁度スコールがあがつて、ダイヤモンドヘッドに大きな虹がかかつていた。残光に海面が光り、海上のヨットの影が点々と美しい。隣席の米国の老夫婦と話す。ご主人は私と同じ年、私の髪があつた黒いと言つて大笑いであつた。船中のショーの歌は外国のものばかりだったが、日本人の客もいると思つてか、そのうち炭鉱節のメロデューに変わった。ウイスキーでいい気分になつた私はマイクを借りて「11月が11月」を出した——と歌つた。船内は笑声と踊りであつた。

ホノルルの街の灯が黒い海上に点々と種々の色彩で実に美しい眺めであつた。

（新宿石川病院から八月五日転院）

「関さんを偲ぶ」

東海病院

桃木 幸男

今回は、悲しいことを皆様にお知らせしなければなりません。私たちの病院で一人淋

しく逝った人が居ります。

本当に今でも透析の時間が来るとふと気になって、ベッドの方に目がうつります。永

い十四年の透析、私たちにとてもおかけがない人でした。何時も優しく明るい笑顔で、私たちを勇気づけてくれ

ました。雨の降る日も風の吹く日も自転車に乗って元氣よく通院していたのに……。

本当に逝ってしまったなんて、悲しいことです。

今日書いたのは関さんも個人会員ですが、東腎協の会員です。皆様にも少しでもわかってもらい、そして「関さんを偲ぶ」の詩をみて、私たちの淋しい思いを知ってもらいたく書きました。

私たち東海病院のひまわり会を作りましたが、まだ会員が少ないので、事務局には通信しませんが、近いうちに腎友会を作り、東腎協のために頑張ります。

「関さんを偲ぶ」

桃木 幸男

関さん

貴女はどうして

私達の前から消えてゆくのか

お互いに励ましあい手を取って

頑張ってきたのに

一人で逝くのか

皆さん心の中で泣いてますよ

関さん

貴女はいつも私くし達の前に

笑顔浮かべてた

十四年の四季を

それぞれの想い出を心に抱きしめて

静かに一人で逝くのか

皆さん心の中で泣いてますよ

関さん

長い旅路でした



ありし日の関さん(左)

苦しい時 哀しい時も

胸の中に秘めて

明るく笑顔で

私くし達を励まし

力になってくれました

もう永遠に逢えない

貴女の顔を心に

さよなら関さん

新たな目標

竹口病院腎友会

井上 慶典

私は今、犬のような生活

している。シャツの作り直

しに入院したのだが、それが

使えるようになるまでの透析

をするための針が首の近くに

あまる。(余命短い身で時間

があまるとは贅沢な話だ)時

間があまると人間ってやつは口

クなことを考えないようにな

きていらいしい。

私はこの時間を利用して童

話を書いている。構想を練っ

ている段階は空想もふくらみ

実に楽しのだが、いざ書き始

めるとイメージが萎んでしま

うことがある。これなんぞ子

どものころにやったカルメ焼

きの失敗によく似ている。

去年の八月から始めたのだ

が、今十一作目を手掛けている。

専門家に見れば欠作・駄作かもしれないが、読んで

う。将来、十分な数がたれば

一冊にまとめたなどという

野望もないわけではない。も

しそれが実現されれば私がこ

の世に生きた物的証拠になる

はずだ。

もし作品を読んでもくださる

方がありましたら、左記にご

連絡ください。コピーをお送

りします。

〒

西多摩郡

井上慶典

常任幹事が

日本平へバスハイク

九月三十日から十月一日に

かけて、東腎協常任幹事と全

腎協事務局員が合同バスハイ

クに行ってきました。

日頃の活動の疲れをいやす

絶好の機会でしたが、カラオ

ケ、ゲームに張り切り過ぎて

疲れてしまいました。しかし

楽しく、さわやかな日を過し

ました。

(草間記)

ブロッック交流会見聞記

東腎協事務局次長 竹田 文夫

前期のブロッック交流会は各地区とも、六、七月に集中しました。今回は患者会交流会であり、前回のようには患者会役員交流会ではなく、どなたでも自由に参加できる交流会でした。従って各ブロッックとも三十名以上という多数の参加者で大盛況でありました。

活動報告は各交流会とも共通したテーマが二、三あり、その中にスライド観賞の部門がありましたので、私が手掛けておりました関係で撮影を担当し、各ブロッックに出席しました。

各ブロッックとも大体同様なご意見や質問が沢山出ておりましたが、どうしても東腎協役員への質問であるように思えました。質者ではないのです。医学的質問も多くありました。わかっている部分は役員の人でお答えしておりますが、個人個人の体の状態が違

いますので、出席者が皆さんで話合い、参考にした方が良いのではと思いましたが、

一、二のブロッックではフリーでお互いに思い思いで気楽に話合い、ほとんどの方が発言しており、和やかで意義ある交流会であったように思いました。折角の交流会ですから役員への質問も結構ですが、お互いに交流を深めて話し合った事例を参考にして欲しいものです。

後期の交流会では病院単位の行事は参加者を集めるのが困難であるとのご意見も出ましたが、どうしてもよいかの発言も少なく、結局事務局一



いつも参加の本吉さん



区東部患者会交流会

任の形になったように思います。一、二のブロッックは積極的に行事を立案し、実行いたしているところもありました。

また、

自由懇談での各自の発言の中で、私が胸を打たれたことがあります。その一つが東部の参加者ですが、現在お年が八十歳(新小岩・本吉さん)の高齢でありながら交流会には毎回参加をしており、自分の患者会では役員をして活動に励んでおり、中々元気で頑張っており敬服しました。次に南部の交流会に参加されました方が不自由で杖をつきながら東腎協の活動にはほとんど出席しているとのことです。女性の方ですが、一緒に歩きますと私の同じ早

さで歩くほど元気です。中々元気に参加しておりますが、「自分のことですから」と言われた時は只、心を打たれました。

一方、中央部の交流会では透析歴二十年以上という方が二名も参加しており、透析導入期には苦しいこともあり大変でしたが、現在までに合併症もなく、格別困ったこともないとのこと。一見健康者と変わらぬほど元気です。現在四十歳代と聞きまして、仕事も普通人と一緒に働き、何等問題がないとのこと。こういう方々がおられます。皆さんが明日に向かって頑張っております。

女性の方も多く参加しております。女性の方が、やはり元気な方の発言は活発であり、何等不安を感じずにサークル活動や旅行などにどしどし参加している方もおりました。南部の会員の方で透析導入して日が浅い方ですが、非常に心配しており、これからどうなることか元に戻るかなど心配事が先になり、いつそ

事死を選ぼうとした話も出ました。でもこうして参加してみても、同病の方が沢山おり、皆さんの元氣を見て元気づけられたとの事でした。こうして苦しい思いをしている方々へのアドバイスなどお互いに励ましたい言葉も欲しいと思います。

意外に残念なことは個人会員の方々の参加者が少なかつたことです。特に個人会員の方々は会の組織がない訳ですからこのような機会に大いに参加して皆さんと交流を深めて欲しいものです。自分だけの殻にとじこもらず、どしどし参加していただきたいと思

います。役員は皆さんの手、足、で生活、いきがけが出来るように、福祉や年金、医療などについて企画、検討をしている訳です。あくまでも皆様の会です。どしどし参加をして、また、事務局へもご意見も出し、自分のために利用して下さい。新しい自分にあえるかもしれません。

食へ歩き

趣味のグループ紹介(1)

今年の五月に患者会活動調査を行い、趣味のグループについて各患者会から回答をもらいました。編集委員会で「趣味のグループ紹介」として、訪問インタビューを行い、特集として連載することになりました。第一回は多満ビル診療所ひまわり会の「食へ歩き」のグループを訪問しました。(文・写真 草間)

五日市街道際の拝島駅から歩いて三分のところに多満ビル診療所がありました。編集委員の東野さんと私が訪ねたときに、すでにひまわり会会



長崎さん、キリーさん、会田さん、飯塚さん、石田さん、横戸さん、からさん、真右さん、塩野さん、写本さん

かがわれました。

グループのはじまり

「いつごろから「食へ歩き」のグループは活動してしましたか」

月・水・金の患者さんが三年ぐらいまえに御岳へ食べに行ったのが最初でした。そのあと火・木・土のグループも始めました。

いきっかけになったことは、透析のおとながすすめて、何かおいしいものを食べに行こうというのがきっかけでした。そのうち、御岳など奥多摩のおいしい店に食べに行くようになりました。

(直ぐ近くに御岳 秋川溪谷) があり羨ましいかぎりです)

メンバーは、一メンバーは会員全員です。が、何回も行くうちに大体決まってきました。月・水・金のグループの人たちは泊まりこんでりんご狩、びわ狩などに帰っています。

月・水・金は岡本さん、会田の石田さん、透析十五年目塩野さんが主なメンバーで

す。

インタビューには透析が終

わったばかりの火・木・土のメンバーの前副会長の横戸さん、そしてキリーさんにも話に加わってもらいました。

「男性はいいのですか」
男の人もあります。やっぱり男性が入らなければおもしろくないです。(笑い)

今までの活動

「どのような所に行かれましたか」
この近くのいろいろなところへ食べに行きました。が、三年ほど前から何度も行っている石龍飯店中華料理・羽村、福生) はおいしかった。パーベキューの山溪、そばのうまい加賀屋も良かった。車で行きますのであまり歩きません。

「写真がありますか」
おいしいものを食べに行くのが目的なので、写真はあまりありません。

(行った先での写真を本誌で紹介する予定だったので、写真がないのでインタビュー

「ユー今日の写真を紹介しました」

「活動を通じて得られたこと」
お互いに親睦が出来ること、そしていつも笑いが絶えず、透析を忘れず。明るくほがらかになります。

「出掛ける」と家族のことを忘れます。一緒に行っているみんなが家族です。
「おいしいものを食べて、ハマトも上がります。(笑い)」

これからのこと

「これからの予定は」
また良いところがあったら、六月に行つた原島荘が良かったので紅葉を見ながら山菜料理でも食べに行こうと思っています。

「取材をして感じたことは、今の女性の透析者は明るいということです。透析初期(二十年前)は男性の方が強く明るかった。当時は女性が透析にかかれな時代だったことを思い出しました。」

第25回

移植学会総会公開シンポジウム

オーストラリアでの日本人母子間の生体肝移植など日本での臓器移植をめぐる新たな問題が提起されている中で、九月十日・十三日の両日、港区虎ノ門の国立教育会館で移植学会（会長 東京医大太田和夫先生）の公開シンポジウムが開かれ、東野協から延べ八人が参加しました。その概略を報告いたします。

公開シンポジウム I

臓器移植—日本の現状を考える

移植学会会長の太田先生の挨拶の後、国立循環器センター・雨宮浩先生と筑波大学社会学科系刑法学・斎藤誠二先生の司会で始まりました。

最初に荒波よしさんが胆道閉鎖症の子供を持つ親の立場から、肝臓移植を前に亡くなった娘さんの体験談を通して、日本での肝臓移植の必要性を訴えました。

次に仲田定雄さんが、心肺同時移植を必要とする娘さんが七年前亡くなり、娘さんの臓器移植に対する手記を通して荒波さんと同様、日本での臓器移植を訴えました。

三番目に息子さんの臓器を提供した親の立場から千葉太玄さん

が、米国で事故を起こし脳死状態

の息子さんの臓器をほとんど提供できたのも米国であるからであり、日本でも早く提供できる体制を作る必要性があると訴えました。

さらに、帝京大学文学部国際文化学科・藤田真一先生が、脳死と臓器移植推進の立場から国民的合意が行われ、臓器移植の必要性を主張しました。また、善意の提供は当事者の意識を尊重しその気持ちを大切にする必要があると訴えました。

三菱化成生命科学研究所・米本昌平さんから日本における脳死の遅れと今後の方向について述べられました。

大阪弁護士会副会長・西岡芳樹先生は、脳死について社会的合意

が必要であり、合意が得られたとしても、これら解決も必要です。移植医療は必要であるが、ドナーとレシビエントの関係は平等であり、医療の平等性が必要であると述べられました。

厚生省衛生局の中島正治先生（医者）は、生命と倫理と対する懇談会で死についての見直しが必要であると述べられました。

最後で大阪腎臓バンク専務理事の泉隆次郎さんの話しを終え会場の意見・質問を受け、司会の雨宮先生が今日のシンポジウムが日本における臓器移植の前進の一步であることを信じてと述べられて閉会になりました。（記・柳）

公開シンポジウム II

臓器提供—何が問題か

移植学会会長太田先生の挨拶の後、太田宗夫（大阪府立千里救命救急センター）、小崎正巳（東京医大八王子医療センター）両先生の司会で始まった。

まず、司会の小崎先生から腎移植希望登録者に対する移植件数の比率はアメリカの六〇・四％に比べ、日本ではわずか三・二％でし

かないことなど、日本における腎移植の現状が報告された。

大島伸一先生（社会保険中京病院）は移植医の立場から、移植の一般化には①医学の進歩②組織・連絡網の完備③臓器の提供の3条件を挙げ、さらに腎提供を増やすには①ドナーの普及②脳外科医の移植医療への参加が必要であると述べた。

また、大塚敏文先生（日本医科大学救命救急センター）は救急医の立場から、死の判定は医師がするもので、脳死の立法化は反対であること、遺族への腎提供のお願いは主治医がやらなければ良い結果が得られないなどと述べた。

次にP・Growth先生はスウェーデンの状況について、昨年脳死が人の死という法律ができたこと、腎移植の症例数は年間三五〇例であること、また、脳死が認められる以前に外国からの臓器提供で心・肝移植を行っていたという発言があった。

アメリカでUNOSのコーディネーターの教育担当をしているB・Gier先生からは、一九八四年に脳死からの臓器提供に関する法律ができ、現在はUNOSとい



上半期の報告をする森事務局長

最大の参加、熱心な討議

第23回幹事会開く

第二十三回東腎協幹事会は九月十七日(日)、午前十時三十分から港区芝の東京都障害者福祉会館で開かれ、三十二患者会から六十五人が出席しました。

司会の木村妙子常任幹事のあいさつに始まり、まず泉山会長から

う非営利団体が臓器の確保、配分、レシビエント登録、専門家の教育などを行っている」と報告された。村瀬敏郎先生(日本医師会常任理事)は、最近の脳死立法化の動きについて、死の判定は医師がやるべきで、法制化の動きになると長引いて停滞していくと思うとの発言があった。その後シンポジズ

トの質疑などが行われたが、全体の印象としては、提供側はメリツトがなく余計な負担になるので協力しにくいと言いつ、移植側は移植の意義を理解していただきたいと言う。医師同志でもまだまだ、脳死での臓器提供に対するコンセンサスができていない様子が浮き彫りになった。(記・森)

今年度に入ってから状況、東京都に腎不全対策連絡会が生まれ、活動が進んでいること、幹事会の位置づけなどの話がありました。議長には東野常任幹事を選出し、森事務局長から平成元年度上期活動報告、中田会計から上期会計報告が行われました。続いて泉山会長が全腎協分担金値上げについてのこれまでの経過についての報告を行い、三つの報告について拍手で承認されました。

午後から昼食をはさんで討議事項に入り、①腎キャンペーンについて②腎臓病を考える都民の集い③会員交流会④国会請願署名・募金運動⑤J.R等運賃割引運動につ

いて話し合われました。討議後、それぞれの事項について拍手で承認されました。

その他の項目では三つの意見があり、最後に高橋副会長が閉会のあいさつをし、幕を閉じました。

学習交流会開催

幹事会の後、二時十五分から、学習交流会が開催されました。講師は「心臓病の子供を守る会」の前会長でいらつしやる小林登さんです。昭和六十三年十月からは幹事として、また昭和五十年以来編集委員として、「心臓をまもる」を毎月発刊するお仕事を続けていられます。

講演の題は「命の大切さと患者運動」という、私たちの透析患者にとっても、まさに東腎協・全腎協発足ののろしとなった生命の尊厳そのものをテーマとなさつたものでした。

ご自分の娘さんが生後すぐから心臓病でご苦労された様子も具体的に語られ、七年前に人事ながら大変なことと新聞紙上で見ていた「心臓病の子供を守る会」への、昭和四十四年からの参加から、現

在に到るまでの活動の内容を解りやすく、暖かな口調で説かれました。

透析患者は本人が病人で身体障害者であり、苦しみは本人が一番深いと思つていましたが、親としての真情を吐露された時は、しばらくの間、絶句され、両親の死後子供がどうしていくかという悩みを訴えられました。しかし、患者運動で今できることをやり抜いていくことで未来が開けるといふ、力強い展望に、励まされました。

私たちも未来を考えると老齢透析者の苦しみを目の前に見ているだけに辛い、暗いものがありますが、活動を続け、運動を生き生きと続けることによって個人的なものでなく社会的な救済の道が必ず拓け、それが、私たちだけの福利でなく、人間皆の厚生の上となつていくのだという、手探りではありますが、自信のようなものを持つことができました。

特に世界人権宣言の引用と患者運動の大同団結を訴えられた点で会場に深い感動と共感を生みました。質疑も意義深いものが多く、時間一杯まで続き充実した学習交流会でした。

(木村・記)

事務局から

年生活活相談

随時行っています

東腎協では年金などで困っている方のために随時相談を行っています。相談窓口は東腎協事務局 TEL・FAX 九五二一四〇六五

腎臓病を考える都民の集い

- 日時 11月26日(日) 0時30分～4時
 ○会場 中野文化センター
 ○内容 パネルディスカッション
 (腎臓病を克服するために)
 北川照男(日本大学教授)
 小崎政巳(東京医科大学八王子医療センター長)
 小出輝(順天堂大学病院教授)
 泉山知威(東京都腎臓病患者連絡協議会会長)

機関誌の発行月

東腎協では年四回(当月中旬)、一月、四月、七月、十月に機関誌「東腎協」を発行しています。全腎協は年六回(当月上旬)一月、三月、五月、七月、九月、十一月に発行しています。

そのほかに総会の一カ月前前に議案書を東腎協、全腎協それぞれから発行しています。投稿される方は発行の一カ月前までにお願ひ致します。

ポウリング大会

1月28日に開催予定

青年、婦人部準備委員会では青年・婦人部の結成に向け、ポウリング大会を二月二十八日(日)、午後から高田馬場シチズンホテルにおいて開催する予定となっています。大勢のみさんの参加をお願いします。

鈴木澄雄さん埼玉へ

一九八七年度から編集委員として活躍された鈴木澄雄常任幹事(三鷹北口病院腎友会)は埼玉県川越市に引越すことになりました。今後は埼玉腎友会の一会員として

活躍を期待しています。

なお鈴木常任幹事の後任として川島桂輔さん(三鷹北口病院腎友会)が常任幹事オブザパーとして出席しています。

詩・俳句など

お寄せ下さい

編集委員会では「なかまのたまり」で詩・俳句などの文芸コーナーを検討しています。投稿をお待ちしています。

東腎協会員交流会

テーマ別に学習交流

11月5日開催

東腎協会員交流会は十一月五日(日)、東京都障害者総合スポーツセンター(北区十条台)に於て午後一時から開催されます。各グループ十五人程度に分れて、日頃の体験などを話し合います。

〈テーマ〉

- Aグループ 生活
- Bグループ 長期透析と合併症
- Cグループ 会活動について
- Dグループ 青年男女の諸問題
- Eグループ 婦人の諸問題
- Fグループ 非透析(慢性腎症)
- Gグループ 年金相談コーナー

新入会員紹介

よろしく

斉木美穂、上原精二、高島寛造、金沢利博、加留博、山本君子、荻原広次郎、野口守弘、溝口峰吉、田中英治、北爪勇、小菅康照、飯塚敏江

くにたち板会(13人)

〒186 国立市中1-9-1

増田ビル3階

大山クリニック内

三鷹北口病院腎友会

〒180 武蔵野市中町2-1-9

三鷹北口病院内

〈編集後記〉

スポーツの秋。私たちにとって
はスポーツを見る秋でしょうか。
先日、世界記録を以て一歩の溝口
のヤリ投げを見た。連戦の疲れか
らいま一つだったのが、収穫は解説
の中にあつた。ヤリ投げでもハイ
ジャンプでも、色々な人から忠告
を聞き過ぎてフォームをくずし、
調子を落とす選手がいるとのこと
だ。我々の腎臓病もあまりにも色
々の人からの忠告を聞きすぎてリ
ズムをみだして体調をくずすこと
があると思う。(草間)